

オリ・パラだより

第4号

綾部高校体育科

平成29年9月1日

大江季雄選手と西田修平選手

同率2位で分け合った「友情のメダル」

1936年のベルリン大会。棒高跳び決勝は、大江季雄、西田修平という二人の日本勢を含む4人の争いとなりました。アメリカのメドウスが4メートル35を跳び、金メダル確定。大江、西田両選手の記録はともに4メートル25でしたが、「日本人同士で争うことはない」と2、3位決定戦を辞退しました。ここまで5時間以上に渡る大接戦で、二人とも疲れ果てていたのです。日本側は、先にクリアした年長の西田を2位、大江を3位と届け出て、これが公式記録として認められました。競技翌日の表彰式では、西田は後輩である大江に2位の表彰台に立つよう指示しました。「次の東京大会で頑張してほしい」という激励の気持ちからだだったといえます。帰国後、二人は銀と銅のメダルを半分に割り、つなぎ合わせたメダルに作り直しました。しかし、1940年東京大会は第二次世界大戦のために中止。大江は41年にフィリピンで戦死しました。二人の思いは戦争によって断たれてしまいましたが、つなぎ合わせたメダルは「友情のメダル」として今も人々の記憶に刻まれています。

フェアプレーとは、「(1) 運動競技で、正々堂々たるふるまい。(2) 公明正大な行為・態度。」です。スポーツにはルールがあり、そのルールを守ることでアスリートが互いに競い合い、高めあう。それがスポーツマンシップであり、オリンピズムの一つです。

『オリンピック精神は友情、連携そしてフェアプレーに基づく相互理解が必須である』～オリンピック憲章「オリンピズムの根本原則」より～



大江季雄氏の友情のメダル



大江季雄選手は現在の西舞鶴高校の出身です。西舞鶴高校のグラウンドの横(体育館の前)に大江選手の銅像があります。今度、西舞鶴高校へ行く機会があったら是非見てきてください。



オリンピックには多くのエピソードがあります。今回のように良いものもあれば、そうでないものも・・・



TOKYO 1964

東京大会



札幌大会



長野大会

過去、日本では1回の夏季と2回の冬季のオリンピックが開催されています。2020年東京大会では、どんな感動が生まれるか楽しみです。皆さんも何らかの形で関わって欲しいと思います。

次は、オリンピックのフェア精神と相反するドーピングについての話です。

ドーピングとは、スポーツ選手が試合に際し薬物を使用すること。スポーツ精神の立場と医学上の立場から、特にヨーロッパで薬物使用が問題とされ、1960年ローマ・オリンピック競技大会でデンマークの自転車選手がドーピングのために死亡した事故がきっかけとなって1968年グルノーブル・オリンピック冬季競技大会から正式にドーピング検査が行なわれるようになった。薬物使用者は出場停止または失格となる。禁止薬物には、交感神経作動アミン、中枢神経刺激剤(→中枢興奮剤)や麻薬鎮痛剤(→鎮痛剤)、蛋白同化ステロイド(→蛋白同化ホルモン)、利尿剤などがある。1988年ソウル・オリンピック競技大会でカナダのベン・ジョンソンが陸上100m競技で金メダルを獲得したものの、競技後のドーピング検査でアナボリック・ステロイド(筋肉増強剤)が検出され失格となって、世間の関心を集めた。

一方で禁止薬物の成分は風邪薬などにも含まれており、知らずに服用して問題となる例もある。もとは競馬において、よい成績を上げるために競走馬に与える薬物をドーピングというところから用いられ始めたことばである。

2020 東京オリンピック・パラリンピックのドーピング対策について

2020年東京五輪・パラリンピックに向けたドーピング防止対策を強化するため、日本スポーツ振興センター(JSC)が5月に違反の内部告発のための通報窓口を設けることになった。超党派のスポーツ議員連盟も、国内初のドーピング防止法案を今国会に提出して、18年度の施行を目指すことにした。開催国として厳格な姿勢を示し、1000人を超えるロシアの組織的なドーピング違反の発覚で価値が低下した五輪をクリーンな大会とアピールする狙いがある。

通報は電子メールに限られ、匿名でも可能。対象は日本オリンピック委員会(JOC)と日本パラリンピック委員会(JPC)の強化指定を受けるようなトップ選手だ。ドーピングは支援者の影響が大きいことから、コーチや強化スタッフとなる一部の医師も対象に含める。

ドーピング違反は巧妙化して検査結果だけでの摘発は限界にきている。ロシアの違反発覚も、内部告発がきっかけで、情報を積み上げて摘発する狙いを定める「インテリジェンス」と言われる手法が重視されている。これまで五輪で違反者を出していない日本にはなじまないが、JSCは「抑止力を高めるためにも、相互けん制の仕組みは必要だ」と強調した。

国際オリンピック委員会(IOC)のバッハ会長が昨秋に来日した際、安倍晋三首相に「20年東京五輪をもっともクリーンな大会にしたい」と支援を要望した。スポーツ議連の法案はドーピング防止がスポーツ界のルールではなく、国として違法と位置付けることを意味する。